

2月第2週の礼拝説教

■日 時：2023年2月12日（日）10：30－11：30 降誕節第8主日（創立記念日礼拝）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「その人たちの信仰を見て」

■聖 書：ルカによる福音書5章12～26節（新約p110）

■讃美歌：6「つくりぬしを讃美します。」224「われらの神 くすしき主よ、」

本日は立川教会創立72周年を記念し、今まで立川教会を導き支えてくださった主なる神様に感謝をして礼拝をおささげしたいと思います。私共の立川教会は昭和26年2月11日に現在のこの場所ではなく、もう少し駅に近い柴崎町の民家で最初の礼拝をおささげしました。いわば、立川教会が誕生したのです。先週の金曜日2月10日に、この近辺にも雪が降り数センチの積雪がありました。非常に寒い一日でしたが、エアコンや灯油のストーブで温まることができました。しかし、72年前の2月11日はどうだったのでしょうか。一年中で最も寒い時に、おそらく暖房も火鉢ぐらいの小さな部屋で、13名の方々が心を燃やして礼拝をささげたことでしょうか。その信仰の灯を私たちは大切に守りさらに輝かせながら、次の世代へと伝えていかなければならない、と深く考えさせられました。

さて、先ほど司式者によって読んでいただいた本日の聖書箇所は、区切り方に違和感を覚えた方もいるはずです。日本基督教団の聖書日課から取り上げているのですが、何度も確認をしてしまいました。私自身の考えで選ぶのであれば、おそらく「思い皮膚病を患っている人をいやす」という段落と「中風の人をいやす」という段落は分けてお話したことと思います。しかし、他の観点から選択されている箇所を取り上げると何度も聖書を読むことになり、今まで見えなかったことが見えてくるという経験をしました。まず、ルカによる福音書5章12節には、「**全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。**」と記されています。彼はもちろん、重い皮膚病の癒しを願ったのです。しかしそれは、当時のユダヤ教の社会の中では、重い皮膚病にかかった者は「汚れた者」であり、人前に出られないだけでなく、何よりも神様のみ前に出て礼拝をすることができないという決まりがあったので、単に病気が癒されて元気になればよいということではなかったのです。つまり、彼が抱えていた苦しみは、一見して他の人に知られてしまうという外見に表れる皮膚病のつらさや苦しさとそれによる生活の不自由さだけではなかったのです。その根本には、神様のみ前に出ることができない、礼拝に連なることができない、という深い苦しみがあったのです。その苦しみの中から彼は主イエスに救いを求めました。ですか

ら、彼は何よりも「清くなる」ことを願ったのです。13節に「イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。」と記されています。主イエスがここでなされたことは、まさに、単なる病気の癒しではなく、彼を汚れた者から清い者となされたのです。そのことは、神様のみ前に出て礼拝をすることができない者から、それができる者へと変えてくださったということになります。それが、ここでなされた癒しの深い意味であり、一人の思い皮膚病を患っていた人の本当の救いです。

そのことを頭に置きながら17節から26節を読んでみますと、これまでとは異なった状況が見えてきます。この箇所の話は、マタイによる福音書とマルコによる福音書にもありますから、有名な出来事として伝えられていたことがわかります。主イエスが伝道の拠点としていたカファルナウムの家でのことでした。この日は、近隣のガリラヤ地方の村々からのみでなくユダヤからもその中心であるエルサレムからも、人々がやってきたのです。

「ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。」と17節には記されています。彼らが主イエスのもとに来たのは、おそらく、最近現れて評判になっているイエスという男がどんなことを教えているのかを確かめるためでしょう。ですから、そこに座っている彼らの態度は非常に傲慢なものだったことでしょう。そのような中で、ルカによる福音書だけは「主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。」と、主イエスの力が主なる神様からのものであったことを最初に強調しているのです。18,19節を読みますと、次のように描かれています。「すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。19しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったため、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした」とあります。日本の家のような屋根瓦が乗っているわけではありません。土に草やわらなどを混ぜた日干しレンガなどで作られた建物で平らな屋根でしたし、家の外側に屋根に上るための階段が作られていたようですから、床を担いで屋根に上ることはそう難しいことではないのです。ルカによる福音書だけが「瓦をはがし」と記しています。そのような小さなところからもルカによる福音書の著者が住んでいたのは、そのような瓦を用いた建築があったということが見えて来ます。そうすると、ルカによる福音書が書かれたころには、すでにガリラヤやユダヤではない地中海世界までキリスト教が広がっていたのではないか、ということが想像できます。また、マルコ福音書には、この人々は「四人」だったとあります。床の四隅を持ってやって来て、その四隅を縄で縛って吊り降ろしたのでしょう。彼らは、この病人をなんとしても主イエスの前に連れて行って癒してもらおうとしてこのような行動に出たのです。

主イエスはこれを見てどうなさったでしょうか。20節に「**イエスはその人たちの信仰を見て、『人よ、あなたの罪は赦された』と言われた**」とあります。ここに、この出来事の中での大切なことが示されています。「**その人たちの信仰を見て**」と記されているので、主イエスが見ておられるのは、床に寝かされている病人ではなく、彼を連れて来た男たちです。しかし、主イエスが語りかけられたのは、この病人でした。「**人よ、あなたの罪は赦された**」というのは、中風を患っている病人に対する言葉です。つまり、主イエスが信仰を見つめられた相手と、罪の赦しを宣言なさった相手とは異なっているのです。

主イエスがこの宣言を語られた相手は、中風という病気を患っている人です。床に寝たきりで立ち上がることができず、人に抱えられなければどこにも行くことができない生活をしていました。彼はそのような深い苦しみの中にいました。そこで、主イエスがこの人に対してお語りになったのは、「**あなたの罪は赦された**」という言葉だったということです。この言葉によって、彼に対する救いを告げておられるのです。本日の聖書箇所は12節以下で、重い皮膚病にかかった人に、主イエスは「**よろしい。清くなれ**」と言ってその人を癒されました。そして、17節以下では中風の人に「**あなたの罪は赦された**」とお語りになりました。主イエスは人々が抱えている様々な問題をしっかりと見つめ、そこで嘆いている声をしっかりとお聞きになっておられるのです。だからこそ、一人一人に、一番必要な救いの言葉をかけて下さるのです。そして、主イエスの「**あなたの罪は赦された**」という救いの言葉を引き出したのは、「**その人たちの信仰**」であったことに私たちは、注目したいと思います。癒された中風の人は、「**神を賛美しながら家に帰って行**き、その場にいた「**人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、**」**「今日、驚くべきことを見た」と言った。**」とこの出来事は結ばれています。

私たちは、時には「清くなれ」と癒していただかなければ救われない重い皮膚病の者であり、また時には「あなたの罪は赦された」と宣言していただかなければ起き上がれない中風の者でもあるはずですが、私たちが真剣に隣人のために祈り働く時には「**その人たちの信仰を見て**」と主イエスに見つめていただける者でもあると思います。これらの出来事こそが、2000年以上にわたって続いてきた教会の姿であり、私たちもまた、そこに置かれている礼拝の姿である、と確信いたしましょう。そして、そのことを私たちもまた次の世代へと伝えてまいりたいと思います。